ティーチング・ポートフォリオ

大学名　湘南医療大学
所属　保健医療学部
名前　田島　明子
作成日　2023 年 9 月 28 日

1. 教育の責任

私は、湘南医療大学のリハビリテーション学科（理学療法学専攻 40 名、作業療法学診療専攻 40 名）において、主として作業療法学専攻学生の専門教育科目を担当している。作業療法学専攻は、厚生労働省が認める国家資格である作業療法士免許の受験資格を与えることを主な目的としている。国家試験受験のためには厚生労働省が定めた身体障害に対する作業療法や精神障害に対する作業療法を含む作業療法に関連した 61 単位を履修することが定められている。湘南医療大学では、前述の 66 単位のうち、外部の病院で行う臨床実習 22 単位を除いた 44 単位について作業療法学専攻教員 で実施している。私が担当している専門教育科目は、国家試験に定められた老年期障害に対する作業療法に関連した科目 3 科目（3 単位 45 時間）、作業療法理論（1単位、15 時間）と、チューター長として担当学年時に担当する科目として、作業療法基礎1A、1B、ⅢA、見学実習、地域リハビリテーション実習あわせて 5 科目（5 単位 135 時間）である。リハビリテーション学科作業療法学専攻学生は、卒業に必要な 127 単位中 106 単位が必修となっている。また、リハビリテーション学科作業療法学専攻を卒業したほとんどの学生は作業療法士として病院や施設で障害を有する人にリハビリテーションを実施することになる。学生が対象とする患者様の障害像は同じものはなく、学校で習った知識や技術をそれぞれの障害像に合わせるための工夫や、対象者に対する説明能力を養うために、研究方法論演習や卒業研究を担当してきた。このほかに、大学院の授業では、オムニバスとして 2 科目（8 回 16 時間）の担当をしており、このほかに大学院生 1 名に対して修士論文の研究指導を行っている

学内業務として、2021 年度入学生チューター長として、2021 年度入学生の学修状況の把握や学修や生活に何等かの問題の生じた学生への指導、必要に応じて保護者との連携を通じた学修サポートを行ってきた。また、FD 委員、ハラスメント委員を担当しており、作業療法学専攻の FD 活動の推進、ハラスメント委員として、学科教員の人間関係上の相談にも応じている。

2. 私の理念・目的

1） 私の理念

教育に関する私の理念は 3 点ある。1 点目は、PBL（Problem Based Learning：問題基盤型学習）など、主体的学びを促進する手法を授業内に積極的に取り入れていくということである。これまで担当してきた老年期作業療法学においても、シナリオを基に、グループワークにより体験を行いながら、考え、調べ、まとめ、プレゼンテーションを行う過程を経ることで、一方的な知識伝達型の授業では得られない、実体験に根ざした学びを行ってきた。さらに今後は、自己調整学習理論等を援用しながら、自身を主体的な学習者として成長させる諸段階を踏まえたうえで、より具体的な主体的な学びを得るための教授方法について検討したいと考えている。

2 点目は、講義における到達目標に対する学生の習熟度について、全講義終了後に到達度を筆記試験によって評価することを重視するのではなく、講義の進行のなかで、スモールステップで学生の理解度を確認しながら、学生の講義への取り組み状況も形成的評価として、評価内容に組み込むということである。どの学生も初回の講義には目を輝かせて、これからの学びに期待感を持っているものである。しかし、回を追うごとに、理解が及ばない点が増え、講義について来られなくなってしまう事例を少なからず経験してきた。そのため、小テストを頻回に実施しながら、個々の学生の理解度をスモールステップで確認しつつ、適宜フィードバックを行う形成的評価を取り入れることが大切と考える。

3 点目は、障害当事者による講義の機会を積極的につくり、当事者から学ぶ姿勢と視点、支援に活かす力を培う教育を行うということである。これまで担当してきた地域作業療法学では、障害当事者であり作業療法士である人や、障害当事者の地域活動として農業を主軸としたNPO 法人を立ち上げた作業療法士やそこで働く障害当事者に来てもらい、障害を持つ前と持った後の人生、障害を持ち地域で生活する様子、どのような支援を望むかについて学生に向けて話しをして頂いた。学生は、生の声を聴くことで、障害当事者の経験を追体験でき、自身の問題関心に引き付けながら、どのような作業療法を行うべきか、真剣に考える機会となった。さらに今後は、得た知識を内省化し、支援に活かせる学修方法を模索し、展開したい。

2） 理念をもつに至った背景

私は、大学における教育活動に携わり 13 年が経過するが、そのなかで、教員による一方的な授業展開による弊害を感じることが多かった。具体的には、授業に集中できず、寝てしまう学生が見られたことである。私自身の授業内容の魅力が薄いことが一番の原因と思われ、自身の話術に対する自信喪失感や授業展開の知識技術の不十分さを切実に思い抱いたが、すぐさま変容することの難しさも同時に感じ、解決策が見い出せない状況にあった。

そうしたところ、第 42 回理学療法士・作業療法士・言語聴覚士養成施設等教員講習会の受講機会に恵まれ、講義を通して、近年は、従来の教員による一方通行の授業形態について様々反省的な考えが生まれ、教員と学生の相互作用を積極的に取りながら、学生の主体的な学修を促進する授業方法が様々開発されていることを知ることができた。それは、教育原理として、学生を教えられることを従順に学ぶ学習者ではなく、自らの疑問に基づき、動機づけられ、主体的に学修する学習者として捉える学習者観を持ち、教員の役割は主体的な学習を行えない学生を否定することではなく、どのような授業展開をすれば、学生が主体的な学習者となり得るかを創意工夫することにあると理解できた。

そのような教育への学びから、PBL（Problem Based Learning：問題基盤型学習）など、主体的学びを促進する手法を授業内に積極的に取り入れ、また、小テストを適宜行い、スモールステップで学生の理解度を確認しながら、学生の講義への取り組み状況も形成的評価として、評価内容に組み込むという授業スタイルを確立してきた。

1.　教育の方法・戦略

老年期作業療法学Ⅱ（各論）を例にとり、PBL（Problem Based Learning：問題基盤型学習）を授業で取り入れる方法・戦略について説明する。老年期作業療法学Ⅱ（各論）は、3 年次後期科目であり、必修 30 時間、授業形態は演習となっている科目である。3 年次前期科目として、老年期作業療法学Ⅰ（総論）という必修 15 時間、授業形態は講義という科目があり、老年期作業療法学Ⅱ（各論）が修了後には、評価実習が行われる。つまり、本科目は、これまでの老年期障害作業療法についての学びの統合化と主体的な問題解決の過程を経験することを目的とした科目と位置づけられる。そこで、方法・戦略を以下のようにした。

① PBL（Problem based Learning:問題基盤型学習）とする。
② 1 回目の GW の際に「PBL を学ぶ」教材で PBL の意義や方法についての知識を得てもらう。
③ 認知症高齢者についてのシナリオを提示し、PBL（4 コマ/1 回）は 2 クール実施する。
④ 毎回、司会・板書・記録の担当を決めさせ、リーダーシップ、フォロワーシップを経験することの重要性を教示する。
⑤ 各グループのダイナミズムや進捗を把握するためにGW後にリフレクションペーパー（担当、議論内容、次回やること、良かった点・悪かった点）を毎回提出させる。
⑥ GW 後に発表によって全体への共有化をしてもらい、その後、知識定着をはかるための座学の講義を行う。
⑦ 成績評価は、ディスカッションへの参加状況 40%（5×8=40 点）、発表 30%（2×15=30 点）、レポート 30%（2×15=30 点）とする。

2.　学習成果

教育活動の評価・成果として、2021 年度講義の際の、1)学生のリフレクションペーパーの内容、2)ピアレビューの評価、3)授業評価の紹介をする。

1)　学生のリフレクションペーパーの内容

下記は、受講した 3 名の PBL 後のリフレクションペーパーの内容を一覧表にしたものである。

	今日議論したこと	次回すること	良かった点・反省点
Aさん（PBL1／2）	ケース1 前頭側頭型認知症の患者さんをICFに基づいて分類した。	人間作業モデルMOHOを用いて患者さんの全体像を把握する。また、問題の焦点化を行う。	グループで行うことでスムーズに要点をまとめることが出来た。また、様々な意見が混ざり合うことで個人では気づくことの出来ないことにも気付き、よりより内容の物が出来上がっているように感じた。
Bさん（PBL1／4）	発表資料作成を行った。パワーポイントの説明順を班員で議論した。	事例発表	話し合いの構成が間違っていて、振り出しに戻るといった時が何度かあって混乱してしまった。みんなの意見をまとめる人が今日は出てこなかった。
Cさん（PBL2／3）	長期目標と短期目標の具体的な設定を行った。そこから、治療プログラムの立案を実施した。治療プログラムはいくつか挙げ、それぞれ段階を付けて具体的に示す事を心掛けた。また、各治療プログラムに対するリスクと対処法についてもPBLを行った。また、作業的存在的視点から考察を行った。	今までのPBLを含めて、次回からはパワポ作りを行なっていく予定です。見やすいような資料作りを目指して、班で協力して取り組んでいきたいと思いました。イラストなどを効果的に用いて分かりやすい発表ができるように、意識して製作していきたいと思いました。	今回も積極的にディスカッションし、計画に沿って進めていく事ができたので、良かったと思います。ただ後半まで失語症という症状があることを忘れて治療プログラムを立案してしまっていたので、今後は気をつけていきたいと思いました。分からないことや疑問なことは言い合い班のみんなで共有することの出来るこの関係性は、PBLを行ううえで重要であると感じました。

2) ピアレビューの評価

下記は、作業療法学専攻教員2名に、学生の発表の際に、学生の学習状況についてピレビューを受けた際のコメントである。

	コメント
A先生	学生は講義がないにも関わらず広範な情報を集め、それなりに解釈して発表をすることができていた。学生の学習意欲の向上によい授業だと感じた。
B先生	学生同士のディスカッションや質疑応答など、意欲的に授業に参加している姿を見て、授業の段取りや工夫点を感じることができた。

3) 授業評価

下記は、学生の授業評価の内容である。

知識・技術の向上	学ぶ意欲	探求する力	勉強時間	PBLは学習に役立ったか	総合評価
4．31	4．26	4．23	2．28	4．32	4．32

自由回答は下記のとおりであった。

・個人ではできないところを PBL を活用することでできたのでよかった

・PBL は楽しかったが、一部の学生に負担が集中する側面もあった

・いろいろな人と GW できるようにメンバーの調整を工夫してほしかった

・GW ごとに指導者がいるともっとよかった

・GW は好きなメンバーとやりたい

・いろいろな人の意見が聞けて参考になった

・グループになって考えることで自分の役割ができてよかった

・授業で発表の振り返りをしてくれるのはよかった

・もっとじっくり考えられるとよかった

・認知症の理解が深まった

3.　改善のための努力

前任校では、所属学科において、専門科目の多くの講義で PBL を採用しており、PBL の経験については積み重ねてきた。PBL に適した少人数でディスカッション可能な演習室の確保が難しく大教室での実施であったが、ホワイトボードの活用により、グループ間の空間確保、ディスカッションの視覚化はできた。グループ間で様子がわかるので、メリットになっていた可能性があると考える。

4. 今後の目標

授業評価の内容から、自己学習時間をどのように増やすかは課題と考えているため、長期目標としては、反転授業を取り入れながらの授業展開ができるようになりたい。短期目標は、今学期中に、効果的な反転授業の授業展開や教材開発の工夫について考えたい。